



農

東京農業大学「食と農」博物館

Food and Agriculture Museum Tokyo University of Agriculture

展示案内 No. 78

Exhibition Guide No.78

国際食料情報学部4学科合同展

— つなぐ —

平成29年10月25日(水) ~ 平成30年3月11日(日)

## ごあいさつ

### 国際食料情報学部 4 学科合同展 一つなぐー

開催にあたって

この度は、国際食料情報学部 4 学科合同展 一つなぐー をご高覧いただきまして誠にありがとうございます。

今回の企画展示のテーマは「つなぐ」です。2011年の東日本大震災後、希望を込めて「絆（きずな）」という言葉が広く使われました。「絆」の字は同年末、恒例となっている財団法人日本漢字能力検定協会の「今年の漢字」にも選ばれました。「絆」という言葉には、人と人とが結びつき、支え合い、助け合うという意味もあります。つまり、人と人とを「つなぐ」ということです。

民俗学や歴史学の世界で使われる用語に、「結い」「結」「ゆい」という言葉があります。いずれも同じ言葉で「ゆい」と読みます。かつての日本の「むら」では、田植の時期や稲刈の時期、また屋根の葺き替えの時などに、村人たちが労働力を提供しあって助け合いました。「むら」の人々は、互いに手を「つなぐ」ことで助け合い、支え合い、初めて生きてゆくことが可能だったからです。「むら」という共同体は、このような「結い」あるいは「結」の精神があって、維持していくことができたのです。

18世紀半ばにイギリスで起こった産業革命という産業システムの工業化を契機に、世界は大きく広がり、そして変りました。現在ではグローバル化（グローバリゼーション）という言葉さえ使われるほどになりました。このグローバル化に対する評価は人さまざまです。グローバル化が進むことは、地球上の人々にとってはメリットでもありデメリットでもあるからです。しかし、グローバル化によって地球の均一化・同質化が進み、人々や地域の個性・多様性が失われつつあることは疑いのない事実でしょう。このような世界の現状に対して近年になると、反グローバリズムの動きも顕著になってきました。イギリスのEU離脱やアメリカ合衆国のトランプ政権のパリ協定離脱などは、この反グローバリズムの表れとして理解できます。これらの動きは、言わば「つなぐ」からの離脱とも言えましょう。

一方では多様性や個性の喪失、他方では「つなぐ」からの離脱。そんな今必要なのは、人々や地域がそれぞれの個性・独自性を維持しながら、その多様性を保持しつつ「つながる」ことではないでしょうか。これは食や農においても同様です。

今回の展示では、「国と国との絆をつなぐ」「農村と都市をつなぐ」「人と人との絆をつなぐ」「次世代につなぐ」を4つの大きな柱としました。実際には東京農業大学国際食料情報学部では、この他にも様々な「つながり」を研究・実践しています。展示ではその一端をご紹介させていただきました。そしてこれが、東京農業大学国際食料情報学部の学生たち、教職員たちの「つなぐ」の形なのです。

最後になりましたが、本企画展示を開催するにあたり、ご協力いただきました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

東京農業大学 国際食料情報学部  
学部長 友田 清彦

## 目次

### 国と国との絆をつなぐ

世界をフィールドとした研究の取り組み	飯森文平	p.4
ナイジェリアでの国際協力・支援	志和地弘信	p.6

### 農村と都市をつなぐ

山村再生プロジェクト	山下詠子	p.7
マルシェでの販売実習・調査・研究活動 —生産者と消費者をつなぐ—	上岡美保	p.9

### 人と人との絆をつなぐ

東日本大震災の復興支援プロジェクト	半杭真一	p.11
環境美化清掃活動を通じた地域環境を守る取り組み —学生と地域住民との協働—	北田紀久雄	p.13

### 次世代につなぐ

地域の小学校での食農教育の取り組み	古庄 律	p.14
学生と世界で活躍するOBとの交流	新部昭夫	p.15

### 特別寄稿

Digging：アイルランドの地層を掘り起こす —土と人とのつながり—	諏訪友亮	p.16
--	------	------

## 国際食料情報学部

### ◆国際農業開発学科

開発途上国の発展と地球規模の保全を担うパイオニア

### ◆食料環境経済学科

世界の食料システムと環境問題を経済の視点から研究

### ◆国際バイオビジネス学科

情報戦略を駆使して国際市場で活躍するエキスパートに

### ◆国際食農科学科（平成29年4月より新設）

世界に向けて日本の食農技術・文化を展開

## 国際食農科学科での学びのポイント



#### □食農の技術について学ぶ

- ・地域に根ざした生産技術の修得と新たな農業生産技術の構築
- ・最新の食品加工技術の修得と食品機能性の分析

#### □食農の社会的価値について学ぶ

- ・世界に認められている日本の食と農の文化的・歴史的探求
- ・現代から次世代へ豊かな日本の農と食を継承する食農教育

## 世界をフィールドとした研究の取り組み

国際農業開発学科  
助教 飯森文平

### 国と国との絆をつなぐ

国際農業開発学科はその名称の通り、調査・研究や教育・交流事業、また多くの卒業生などを通じて広く海外の国々とつながっており、そうした「国と国とのつながり」を非常に大切にしています。

ところで、一言で「国と国とのつながり」といっても、そこには多くの国や地域があり、つながり方もまた多様です。そこで、今回の展示では本学科と特につなぐの深い、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、オセアニア島嶼部の4地域を取り上げ、それぞれの地域との様々な「つながり」の形を紹介します。

### アフリカ：モノでつながるアフリカと日本

アフリカの農村は日本から遠く離れた研究フィールドですが、実はモノを通じて私たち日本人の日常生活と深くつながっています。

日本で売られている化粧品や石けんには、西アフリカ産のシアバターが原料として使われています。シアバターは、西アフリカのサバンナ地帯に自生するシアバターノキの実を加工して作るペースト状の油です。この実を採取するのは伝統的に女性の仕事で、シアバターの加工・販売は、女性たちが現金収入を得るための重要な経済活動となっています。肌に塗ると保湿効果があるシアバターは、もともとは現地の女性たちが乾燥する気候から肌を守るために愛用していましたが、近年では化粧品の原料として輸出されるようになってきました。また日本の企業や政府機関も、現地の女性たちが作るシアバターの品質を向上させるため、技術指導をおこなってきました。展示では、シアバターを作るガーナの女性を紹介しながら、モノを通じてつながる日本とガーナの農村との関係を見ていきます。また、シアバターの現物、シアバターを原料として日本で売られている石けんや化粧品なども展示します。



シアバターノキの実



シアバターの加工の様子

### アジア：協定校とのつながり

東京農業大学は、海外大学等教育研究機関との交流や協力活動を積極的に行ってきました。とくにアジアとの関係は、タイを始まりに中国、台湾、インドネシア、モンゴル、フィリピン、韓国、ベトナム、マレーシア、カンボジア、ラオス、スリランカ、ミャンマー、インドの17の大学と協定を結び連携を深めており、本学科も活発な交流をしてきました。

私たちが築いてきた具体的な教育や研究交流の内容について、タイとミャンマーを例に展示・解説します。

### ラテンアメリカ：アマゾンと卒業生

本学には、卒業後アマゾン地域に移住し、現地で農業に従事してきた方々が数多く存在しています。本学科からも、多くの卒業生が移住し農業を行っています。そこで、本展示ではアマゾン地域に移住した農大卒業生の活躍を紹介します。アグロフォレストリーなど、現地での農業経営について解説します。

### オセアニア島嶼部：つながりの社会に調査者としてつながる

オセアニア島嶼部には、経済的な意味での貧しさを抱えた国が多く存在します。しかし、現地社会に目を向けてみると、人々の実生活は相互扶助、モノや価値観の共有（シェアリング）など、人と人とのつながりによって支えられていることがわかります。

こうした人と人とのつながりは、様々な社会慣行によって維持されていきます。例えば、サモア独立国（以下サモア）では、冠婚葬祭、家長の就任式、教会の落成式などに伴い、人々の間で現金、食料、パンダナスという植物の葉で編んだゴザなど、多様な財の交換を伴う儀礼が行われています。現地ではこれをファアラベラベと呼び、一旦この儀礼が生じると様々な人を広範にわたって巻き込んでいきます。財の準備は人々にとって大きな負担ですが、儀礼の実践によって築かれたつながりはサモアの人々の日常生活を支える1つの要素ともなっているのです。

サモアの村に滞在していると、しばしばファアラベラベに遭遇し、つながりの社会に調査者としてつながることになります。本展では、つながることで見えた儀礼の実践について紹介します。



儀礼で踊る一団



相手にゴザを贈る様子



## ナイジェリアでの国際協力・支援

国際農業開発学科  
教授 志和地弘信

国際農業開発学科では2005年から国際熱帯農業研究所（International Institute of Tropical Agriculture: IITAナイジェリア）とヤムイモに関する共同研究を本学の宮古亜熱帯農場やナイジェリアで行ってきました。これまでに11名の大学院生と1名のポストドクターがIITAに滞在しながら、ヤムイモの生産性改善に関する技術開発に携わりました。ヤムイモは西アフリカの主要な作物ですが、その重要性がアフリカ以外の地域では適切に認識されておらず、特に欧米においてこの作物の研究蓄積がないなどの理由から、長い間、共同研究や品種改良の対象とされてきませんでした。ここでのヤムイモ研究を支援してきた数少ないドナーが日本であり、技術開発の協力を担ったのが東京農業大学だったのです。

私たちはヤムイモの種苗の大量増殖方法や周年生産技術を開発した他、機械化栽培技術などを提案し、技術移転を行ってきました。最近の研究では窒素肥料が全くない土壌でも良く生育するヤムイモ品種が発見され、アフリカの経済事情を考慮した少肥料投入型のヤムイモ生産技術の開発を開始しました。



国際熱帯農業研究所に勤務するポストドクター



西アフリカ・ガーナのヤムイモマーケット

## 山村再生プロジェクト

食料環境経済学科  
助教 山下詠子

## ○都市の大学生と農山村をつなぐ“山村再生プロジェクト”

食料環境経済学科で実施している山村再生プロジェクトは、都市の若者である農大生と、典型的な農山村である長野県小県郡長和町の地域住民をつなぎ、価値観の異なる両者が出会い、協働、交流することで学び合い、地域活性化を図るプロジェクトです。

長和町は人口約6,300人の小さな町です。町内にはスキー場やペンション街もあり、山あいに田圃が広がっています。他の地域と同様に、長和町でも過疎化・高齢化や荒廃農地の増加などが課題となっています。一方で近年、大学と地域が連携する取り組みや、若者が地域づくりを目的として農山村地域に移住する取り組みが全国的に広がってきています。山村再生プロジェクトは2008年度に文部科学省の補助事業「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択されたことがきっかけで始まり、今年で10年目となります。

山村再生プロジェクトの核をなすのが、毎月1回2泊3日で行われる実習です。貸し切りバスで20名ほどの学生と教員が長和町を訪れ、遊休荒廃農地を再生させた圃場で様々な農作物（米、機能性雑穀、野菜、果物、コウゾ）を育て、和紙漉きや郷土料理の調理など伝統文化を体験し、草刈りや植樹など自然資源を保護・活用しています。また、神社の例大祭で御神輿を担いだり、町民運動会や観桜会など地域の行事に参加するなど、地域の方々と交流しています。また2年前からは、町からの要望で特産品開発に取り組み始め、「長和かるた」の制作や「長和のトマト」復活の他、シカの食害に遭いにくい機能性雑穀（キヌア・アマランサス・エゴマ）の栽培・商品化に力を入れています。

このプロジェクトを牽引しているのが、学生組織である山村再生プロジェクト学生委員会です。メンバーは食料環境経済学科の1～4年生合計40名ほどで、実習内容の検討、特産品の考案、試作、実習をスムーズに運営するためのサポートをしています。学生委員会メンバーは毎回の実習に数名は必ず参加し、初めて参加する1年生をリードしています。

## ○長和かるた ～世代間でつないでいく地域の魅力～

長和町の町民の方々に長和町の魅力を再認識していただき、さらには、町内のイベントやお祭りに積極的に参加してもらえるようになれば、長和町を内部から活性化することにつながるのでは、という考えから作られたのが、郷土カルタ「長和かるた」です。長和かるたは学生委員会が発案し、読み札の文言、裏面の豆知識、絵札デザインの作製、箱のデザインなどを数年かけて完成させました。和紙に手描きで絵を描いた箱の試作品の完成を経て、2017年度は町に移管し、町の予算で400部を発行・販売しました。

長和かるたは、完成させるだけでなく、町民の皆様実際に使っていただくことが重要になります。昨年度は完成したかるたを小学校へ寄贈したり、高齢者の集いでかるた大会を実施していただく他、毎年農大生も参加している長久保愛宕山桜公園での観桜会でかるた大会を行いました。観桜会でのかるた大会は、農大生が読み札を読み上げ、長和町の子も達が優勝を目指して対戦しました。

○長和のトマト（トマトソース）の加工 ～農大生がつないでいく味～

長和町では、「長門のトマト」という名前のトマトソース（トマトを原料に、タマネギやジャガイモなど野菜も加えたトマトペースト）を地元の団体が作っていましたが、メンバーの高齢化を理由に加工をやめてしまっていました。ですが、復活を望む声もあったことから、山村再生プロジェクトでは現地の方の指導のもと「長門のトマト」の生産を復活させ、実習で加工作業を実施しています。名称を「長和のトマト」に改め、他のトマト加工品を試食して「長和のトマト」の商品としての特徴を検討し、製品ラベルにその特徴を反映させたアレンジを施しました。

「長和のトマト」は原料に生トマトを使うことから、トマトを収穫できる夏の時期しか加工できません。1年で最も暑い時期に白衣やエプロン、帽子を身にまとい、調理施設で火を使った調理を行うのはかなりの重労働となります。作った「長和のトマト」は町内の小売店で販売するほか、本学の学園祭「収穫祭」でも学生委員会が販売しています。町内には根強いファンがいらして、毎年ほぼ完売している人気の商品です。



荒廃農地を復活させた学生による田植え



観桜会でのかるた大会



「長和のトマト」の瓶詰め作業



トラックの積載農作物の固定方法（ロープの結び方）を教わる

## マルシェでの販売実習・調査・研究活動 —生産者と消費者をつなぐ—

国際食農科学科  
教授 上岡美保

かつては、地域で採れたものを地域で消費する、いわゆる「地産地消」を基本に食生活が営まれていました。しかしながらわが国では、フードシステムの深化、輸入農産物・輸入食品の増加等によって、生産地及び消費地の距離の乖離、つまり、生産者と消費者の「つながり」が希薄になってきました。こうしたことを背景に、わが国では、食料自給率の低下、農業者の高齢化・農地面積の減少、農村の活力の低下等の農業・農村における諸問題だけでなく、食品安全や食料安全保障に対する不安、さらには私たち消費者の食や農に対する意識の薄れが課題となっています。

こうした状況を鑑み、平成11年に食料・農業・農村基本法が施行されました。周知の通り、この法律での目指すべき柱は食料の安定供給の確保、農業の持続的な発展、農村の振興、多面的機能の発揮ですが、それまでの農業基本法と大きく異なる点は、消費者重視の食料政策の展開にあります。食料の安全性の確保はもちろんですが、農業・農村の持続的な発展を促す為には、農業・農村の情報を消費者へ発信すること、消費者がそれを理解することが必要不可欠です。

こうした中、生産地と消費地の距離の乖離を是正するひとつの取り組みとして、生産者が直接対面で農産物を販売することができる農産物直売所やファーマーズマーケットが注目されてきました。消費者の立場からは、生産者から直接新鮮な農産物が購入できることで、食料の安全・安心のニーズを満たすものとして全国的に増加してきました。しかしながら、農産物直売所の立地は比較的生産地に近い地域であることが多く、特に東京都の様な大都市圏では、生産



丸の内「行幸マルシェ」での販売実習の様子



丸の内丸ビル「グラムマルシェ」での販売実習の様子



丸の内「行幸マルシェ」での消費者調査の様子



丸の内「つなまるフォーラム」での報告

者から直接農産物を購入する機会が多いとはいえない状況です。そこで、平成21年度に農林水産省は大都市の中心でマルシェを開設し、生産者と都市の消費者とを繋げることで、生産者の所得向上と都市住民の農林水産業への理解促進を図ることを目的に、地産地消・産直緊急推進事業の一環として仮設型直売システム普及事業（マルシェ・ジャポン・プロジェクト）を実施しました。こうした取り組みを皮切りに、大都市圏でのマルシェの開催が注目されることとなりました。



丸の内「エコツツェリア」での調査結果報告

都市部でのマルシェの開催が、今後の地域農業・農村の持続的発展や販路開拓、都会の消費者への啓発の拠点としての役割を持つと考えられることから、食料環境経済学科食料経済研究室の学生が東京丸の内で開催されているマルシェをフィールドとして、販売実習や調査・研究を行ってきました。学生達はこうした活動を通して、「生産者と消費者をつなぐ」ことの重要性を身をもって体験しています。さらに、マルシェでの調査・研究の成果は、丸の内を拠点とする（株）三菱地所と東京農業大学が連携協定を締結していることから、三菱地所をはじめとする丸の内エリアの食に関わる多くの企業の方々にも報告させて頂いており、私たちの東京農業大学の学生教育活動は、「大学と企業とのつながり」としても広がっています。

## 東日本大震災の復興支援プロジェクト

国際バイオビジネス学科  
准教授 半杭真一

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、大規模な地震と津波に加えて、東京電力福島第一原子力発電所の事故を伴い、甚大な被害をもたらしました。東京農大が初めて被災地である福島県相馬市を訪れたのは2011年の5月、津波の被害も生々しく、たくさんの被災者が避難所での生活を強いられていた時期でした。福島県は原子力災害の側面が注目されることが多いですが、相馬市は太平洋に面し、松川浦や相馬港といった豊かな海を活かした産業が盛んであった土地であり、津波の被害が特に甚大でした。

東京農大では、震災後、被災学生への支援やボランティア活動、支援物資送付などを行ったのに加え、研究復興支援として「東日本支援プロジェクト」をいち早く立ち上げ、国際バイオビジネス学科の門間敏幸教授（当時）を中心として、全学あげての取り組みを進めてきました。特に、津波被害地域における相馬方式（東京農大方式）による水田の除塩等による被災農地の復興を進めてきたのです。その成果は「そうま復興米」として結実し、東京農大のレストラン「すずしろ」でも提供されました。

東京農大は2011年5月から継続して「東日本支援プロジェクト」を進めていますが、その背景となっているのが現地の人々との強い絆です。相馬市長立谷秀清氏をはじめとした相馬市役所や福島県、JA等の関係機関と早くから協力関係を築けたからこそ、現在でも新たな課題に対して強調する体制ができています。加えて、学生も現地との絆を築いています。学生ボランティア組織は、在学生の父母で組織する教育後援会の協力のもと、東京農大の特徴を活かした個性あるボランティア活動を展開してきました。仮設住宅における生活環境整備（癒やしのための花壇や家庭菜園づくりといったバイ



早くから現地入りし県や市との密接な連携を構築

オセラピー学の研究成果の実践)を中心とした活動が継続的に展開されたことは特筆できる取り組みといえるでしょう。また、支援対象地域の農家の迅速な営農再開を支援するための学生ボランティアもその後の支援活動展開に大きく貢献しました。プロジェクトでは、被災農家の要請に応じて学生・大学院生を募集し、1週間前後という通常のボランティアに比較して長期間の支援活動を被災農家の要請に応じて派遣したのです。こうした学生・大学院生の活動は、地域の農家に広く知られることになり、東京農



「農大方式」による復興水田の実り

大の復興支援が一過性の研究活動ではないということが広く相馬の農家に理解される契機となりました。プロジェクトが農業者に好意をもって受け入れられた背景には、こうした学生・大学院生の活動があったと言っても過言ではありません。さらに、震災後5年を経過した2016年には、国際バイオビジネス学科・渋谷教授のゼミにおいて学生が現地調査を実施し、収穫祭の文化学術展で震災復興の展示を行いました。またその際、相馬市役所の職員が収穫祭を訪れて講演を行い、また、講演や「そうま復興米」の販売を行うという、人と人の交流が続いています。

現在は、「東日本支援プロジェクト」も新たなフェーズに入っています。継続したデータ収集を行うことと併せ、再生された農地での生産物に対する消費者の評価や、避難指示が解除された地域での営農再開、避難の長期化に伴う鳥

獣害の深刻化、といった課題が新たに発生しています。こうした課題が現地から東京農大に寄せられていることもまた、人と人の絆によるものであるといえます。プロジェクト成果の発信において、東京農大が最も重視しているのは現地報告会です。2017年2月に相馬市で行われた成果報告会は、73名という多くの来場者を迎えて行われました。東京農大と被災地における、人と人の絆による震災復興への歩みは力強く続いているのです。



学生によるナシ園でのボランティア活動



## 環境美化清掃活動を通じた地域環境を守る取り組み — 学生と地域住民との協働 —

食料環境経済学科  
教授 北田紀久雄

表題にある環境美化清掃活動は、世田谷区経堂地区において2002（平成14）年に本学国際食料情報学部食料環境経済学科の教員と学生で組織する東京農業大学農経会が企画・実施したことに始まります。現在では、農経会と世田谷区の出先機関である世田谷区経堂まちづくりセンター（旧経堂出張所）を事務局として、毎年、春と秋の年2回協働実施している経堂地区最大のイベントにまで発展しています。参加者には食料環境経済学科学生・教員はもちろんのこと、地域内の中学生が親子で参加するなど地元住民の方々に止まらず、地域内に事業所をもつ企業からも多くみられます。

現在この活動は、地域環境美化活動というだけでなく、大学と地域住民、企業などの多様な参加者を得て、貴重な交流の場ともなっています。当日はスタート地点として2か所が用意されていて、ひとつは経堂駅を始点として5コースが、もうひとつは千歳船橋駅を始点として4コースが設定されています。それぞれのコースには地域内の名所・旧跡が組み込まれており、学生たちにとっては日頃あまり触れることのない、地域の環境資源や歴史・文化に接する有益な機会ともなっています。

東京農業大学農経会がこの環境美化活動を企画・実施したのは、本学が平素より地元の皆さんからいただいている多くのご支援に感謝するとともに、また一部の学生たちが通学時に地元の皆様に掛ける心無い迷惑行為を反省し、通学路である小田急線経堂駅と千歳船橋駅から農大周辺に至る沿道のゴミ拾いを食料環境経済学科の学生に呼びかけたことからでした。当然これは地区内の住民組織の理解を得ての上でのことです。最初の参加者は学生62名で、初めての清掃活動は地域の皆さんに大変喜んでいただくことができました。その翌年から、活動に興味を示した地域住民組織の代表の方から活動の実験を体験したいという申し入れがあり、それを契機に徐々に地域の様々な組織や学校関係者、事業所などが参加するようになり、現在の形となったものです。

地域の皆さんが参加しての活動は、2017年春（5月27日、141名の参加を得て実施）で28回目となりました。この秋（12月10日）には第29回目の活動が予定されています。

この活動に参加することで学生たちは改めて、食料環境経済学科で学ぶ「地域環境保全」について、様々な人々の協働活動の実践を通じて実現するものであることを体得したといえるでしょう。



地域の方々と共に清掃を行う



ゴミを分別する



キャンパス内での閉会式

## 地域の小中学校での食育教育の取り組み

国際食農科学科  
教授 古庄 律

私たちは皆、生涯をとおして健康で豊かな暮らしをしたいと願っています。健康の基本になっているのは、毎日の食事です。私達人間は、太古から食料を調達するすべとしてはじめは他の動物と同様に野生の植物の収穫や狩猟を行っていましたが、やがて火を扱い、農耕・牧畜の技術を身に付け、それを受け継ぎ発展させたことで莫大な食糧を生み出し、地球上の生物の中で唯一、「文明」や「文化」を開花させ繁栄してきました。世界では様々な理由から貧困や飢餓で苦しむ人々が多い中、私たち日本人の多くは食に困窮することは少なくなり、世界でもまれに見る長寿国となりました。米、野菜、魚、味噌・醤油などを使った日本の伝統的な食スタイルも今では洋風化が進み、小麦加工品、肉類、乳製品などが好まれる傾向も強くなってきました。しかしその一方で、ライフスタイルの変化に伴う食生活の乱れが原因と考えられる生活習慣病罹患者の増加が国民的な問題としてクローズアップされるようになってきました。平成17年に施行された「食育基本法」は、国民一人一人が健全な食生活を実現するために、日本の食文化の継承、食と健康に関する様々な知識と食を選択する判断力を楽しく身に付け、健康の維持増進を目指すための法律であり、食育は産官学を取り込んだ国民的な活動となっています。その目標としては、①食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解すること（食事の重要性）。②心身の成長・健康の維持増進のために必要な栄養や食事のとり方を理解し、自己管理する能力を身に付けること（心身の健康）。③正しい知識・情報に基づいて、食の安全・安心について自ら判断できる能力を身に付けること（食品を選択する能力）。こういった健康に関することのほかに、④食物を大事にし、食品になる生き物・食物の生産等にかかわる人々へ感謝の心を育成すること（感謝の心）。⑤食事のマナーや食事をとおして人間関係の形成能力を身に付けること（社会性）。⑥各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重・継承する心を育成すること（食文化）。などが盛り込まれています。これらの目標はどれも大切なことですが、「食への感謝の心」、「社会性の育成」、「食文化の継承」は私たちが次世代に繋がなければならないもっとも大切なものと考えられます。これらは平和を愛し、母国を誇りに思うと同時に、文化の異なる世界の人々を理解する優しい心の日本人の根本だからなのです。今回の展示では、私たちが地域活動として取り組んでいる小学校における食育授業のプログラム開発と実践の様子を写真（ベジレンジャー、フードモデルを使った弁当作り、味噌作り、実験風景）や実際に使用している教材（紙芝居・自作のフードモデル）で紹介いたします。プログラム開発や実践活動は研究室の学生の積極的な参加により、児童と学生、小学校と保護者、小学校と大学、大学と地域の連携が成功し、子供たちへの食農教育として13年間継続して実施されています。

## 学生と世界で活躍するOBとの交流

国際バイオビジネス学科  
教授 新部昭夫

### 東京農業大学における国際交流の始まりと歴史

本学と南米の繋がりは古く、1914年に第1号の卒業生の移住者を出したことに始まります。日系移住者の中であって大学まで卒業した移住者は少ない存在でしたが、現在までにその数は260名以上に及び、多くはブラジルに移住しました。特に、1956年、千葉県茂原市に農業拓殖学科（現国際農業開発学科）が設置されたことを契機に移住の勢いが増し、多くの本学卒業生がブラジルに雄飛しました。戦後の食料事情が厳しい折、「海外に食糧生産の拠点を作り、日本に輸出したい」との熱き思いを秘めた移住であったといえます。この事実は、東京農業大学にとっては国際化の始まりともいえるものであり、多くの人材を海外に輩出した歴史でもありました。

日本人の移民は、本学の創立者榎本武揚の殖民論によるところが大きいといえます。1891年（明治24年）に外務大臣となった榎本武揚は、出稼ぎ目的の移民ではなく日本の資本によって外国で土地を購入し、移民を入植・開墾・定住させる殖民論を唱え、移住適地の調査も実施しようとしていました。外務大臣退任後の1893年（明治26年）にはメキシコに植民地を計画し、4年後には34人が渡航したのです。

戦後移住した日系人は、主に花卉、野菜、果樹園芸などを集中してブラジルに導入し、国の主要な輸出品にまで発展させました。本学卒業生の移住者も困難な開拓と貧困に喘ぎながら、これら農作物の栽培方法の開発や品種改良に努め、また農業指導者としても大きな貢献を果たしてきました。ブラジルからパラグアイ、アルゼンチンへ移住した卒業生も果樹や花卉栽培を各国で普及させました。また、卒業生の1人、坂口陞氏は森林破壊が注目されたアマゾンの自然と農業が共存できるように、樹木の高低差を利用して高層木と中高木を植え、さらに日陰を好む作物、虫が嫌う揮発性物質を発散する樹木や果樹を時系列的に「混植」する農法を開発し、病気によるコショウ農家の壊滅を救いました。この森林農業は「日系アグロフォレストリー」とも呼ばれ、ブラジル国内はもとより世界中の注目を集めました。

### 「人物を畑に還す」教育理念と国際交流

東京農業大学の教育理念は「人物を畑に還す」です。この言葉通りに、農村の子弟を教育し、有能な農業リーダー或は地域社会のリーダーとして農村に還すことを教育の使命としてきました。そして時代と共に、力ある人材を海外に送るばかりでなく、世界各地から留学生を募り、地域のリーダーとして活躍できる人材の養成も行っています。有能な人材を育てて母国に還す、まさに「人材を世界に還す」という取り組みの実践です。この20年間で30名におよぶ若き逸材がブラジルより本学に入学を果たして、現在は母国に戻り農業や企業で活躍をしています。日本からは逆に、国際バイオビジネス学科の南米実習がブラジル、パラグアイ、アルゼンチンで展開され、ブラジルで100名、パラグアイで40名、アルゼンチンで70名に及ぶ学生が実習を行なうことができました。また、2015年より開始された世界展開力強化プロジェクトにより、中南米の協定校への相互学生派遣が行われ、アマゾン・トメアスを中心としたブラジル交流にはすでに23人が参加し、アマゾンニア大学との交流も深めてきました。

協定校のサンパウロ大学農学部にも毎年農大生の留学生を送り出しています。

このように、東京農業大学と南米との交流はすでに100年の歴史を刻み、教育研究をとおした人材の育成や産業の発展に大きく貢献をしています。また、若き学生と本学卒業生との世代を超えた交流は、現在でも先輩後輩の「絆」を深め、学生の人間的な成長の大きな糧となっています。



収穫されたコーヒーの実の乾燥状態を調べる  
(ブラジル)



花卉や果樹農家の皆さんと一緒  
(ブラジル)



花卉栽培ハウスでの実習  
(アルゼンチン)



6,000haの内牛肥育牧場での実習において  
(アルゼンチン)



## Digging：アイルランドの地層を掘り起こす —土と人とのつながり—

国際食料情報学部共通（学部教養）

助教 諏訪友亮



アイルランドの風景

アイルランドでは農業が目に見えやすい。国土の7割以上を農地が占め、1人当りのGDPが世界10位以内の常連になった現在でさえ、就業人口の10%強が農牧に従事しています（日本では昨年農業人口が200万人を割ったニュースが話題になりました）。かつてヨーロッパ最貧国の代名詞であったアイルランドでは、19世紀半ばのジャガイモ飢饉から100年以上のあいだ人材の流出をつづけてきましたが、1960年代にEECが採用した共通農業政策（CAP）による支援を受け経済発展を遂げています。文化の面でも農業の存在は顕著で、アイルランド映画には農民の男性が主人公の『ザ・フィールド』（直訳すれば「農地」の意。1990年公開）なる名作があり、2010年代の今も農家が主役の作品（*Pilgrim Hill*, 2013）が海外の映画祭に出品されるほど、農業はアイルランドの文化アイデンティティにとってなくてはなりません。

それだけに理想の農民像をめぐる、文学史上、有名な事件が起こったこともあります。劇作家J・M・シング（1871～1909）の『西の国のプレイボーイ』（1907）では、アイルランド西部の秘境で英雄扱いされる農家の息子が、女性下着の意である“shift”という語を発したことで観客らの暴動に発展、新聞でも批判され連日劇の中止が要求される騒ぎとなりました。イギリスの植民地であった20世紀前半に、農民の純真さや高貴さは独立を求める都市部のナショナリストによって神聖視されており、この劇が彼らの感情を逆なでにしたのです。当事者である農民から離れ、彼らの理想像が作家グループとナショナリストにより争われたこの事件は、メディアを通じて表現する側（作家、ナショナリスト）と表現される側（農家）が乖離するという問題を表していたとも言えるでしょう。

このような乖離が繋ぎ合わされるのは、農家出身の作家が登場してからです。ノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニー（1939～2013）の実家は北アイルランドで農業を営んでおり、長男として生まれた彼は親の生業を継ぐよう期待されていましたが、奨学金を得てクイーンズ大学を卒業した後、教員をしながら詩を出版しました。

第1詩集冒頭にあるのがヒーニーの詩の中で最も広く知られている「掘る」（“Digging”）です。この詩は、祖父と父の二代にわたってジャガイモと泥炭（植物が炭化した泥状の炭。燃料になる）を掘ってきた記憶を、土に食い込む鋤やピシャピシャの泥炭の様子を音でうまく再現しながら五感を通して甦らせませす。しかし、語り手は農業の後継者にはならないため、書くことで掘る作業をするのだと言います。

けれど彼らを継ぐ鋤がわたしにはない／／親指  
と人差し指の間に収まる／一本の万年筆／これ  
でわたしは掘ろう

*But I've no spade to follow men like them. //  
Between my finger and my thumb / The squat  
pen rests. / I'll dig with it.*

-- "Digging", *Death of a Naturalist* (1966)

詩人になることで途切れてしまった土との繋  
がり、こうしてアイルランドの地層を言語的  
に掘ることで再び結ばれます。

詩人が掘る地層とは歴史であり人々の無意識  
でもあるのですが、回復されたかに見える大地  
との結びつきは、他方で暗い歴史をも呼び起こします。主として北半球の亜寒帯気候の土地に分布し  
ている泥炭地（bog）からは、低温・低酸素・フミン酸などの影響で保存状態のいい考古学的遺物が  
発掘されます。その中にはbog・ボディと呼ばれるミイラ化した遺体があり、紀元前の供犠によって  
豊穡の神に捧げられた死者も含まれます。彼・彼女たちは、ヒーニーの詩集『北』（North, 1975）で  
当時の北アイルランド紛争（カトリック系とプロテスタント系住民が互いにテロ行為を働き、1968～  
98年の間に5万人以上の死傷者を出した）の惨劇と重ね合わされ、美化によって殉教者に祭りあげら  
れる犠牲者（「奇妙な果実」"Strange Fruit"）、相手方と付き合ったため熱したコールタールをかけら  
れる女性（「罰」"Punishment"）として詩中に現れます。

同質性が高く排他的な農村共同体、イギリスの植民地化、その結果として起こった紛争、そのそれ  
ぞれに批判的な一連の詩を発表する傍ら、ヒーニーは農家を営む父の工芸品「ハーベスト・ボウ」（麦  
で作ったしめ飾りのようなもの）にアート（工芸と芸術の2つの意味をもつ）の役割を見ます。

アートが行き着く先は平和である／この脆い細工にある格言はそれかもしれない

*The end of art is peace / Could be the motto of this frail device*

-- "The Harvest Bow", *Field Work* (1979)

紛争を止めるにはあまりに無力なもの、民芸品と詩（「この脆い細工」）は、人々の安寧とともに  
希求しているのです。

アイルランドの文化アイデンティティにとって不可欠な農業者が、周りによって規定される側から  
自ら自己を表す側へと変わっていく過程、さらには農業を通じた創作の可能性を、文学にもとづいて  
見てきました。ここで扱われた個々の作品が織りなす総体は、文化を更新し、農業の持つ社会的地位  
や農業に携わる人々の自信を高めるよう後方から支援していると言えます。土と文化が現在も密接で  
あるアイルランドの事例は、日本における農と人との繋がりを改めて考えさせてくれるでしょう。



ハーベスト・ボウ

## 関連イベント情報

### ■トークショー

東日本大震災支援プロジェクト —相馬市と東京農大の歩み—

講師：半杭真一（国際バイオビジネス学科准教授）

ゲスト：伊東充幸（相馬市役所）

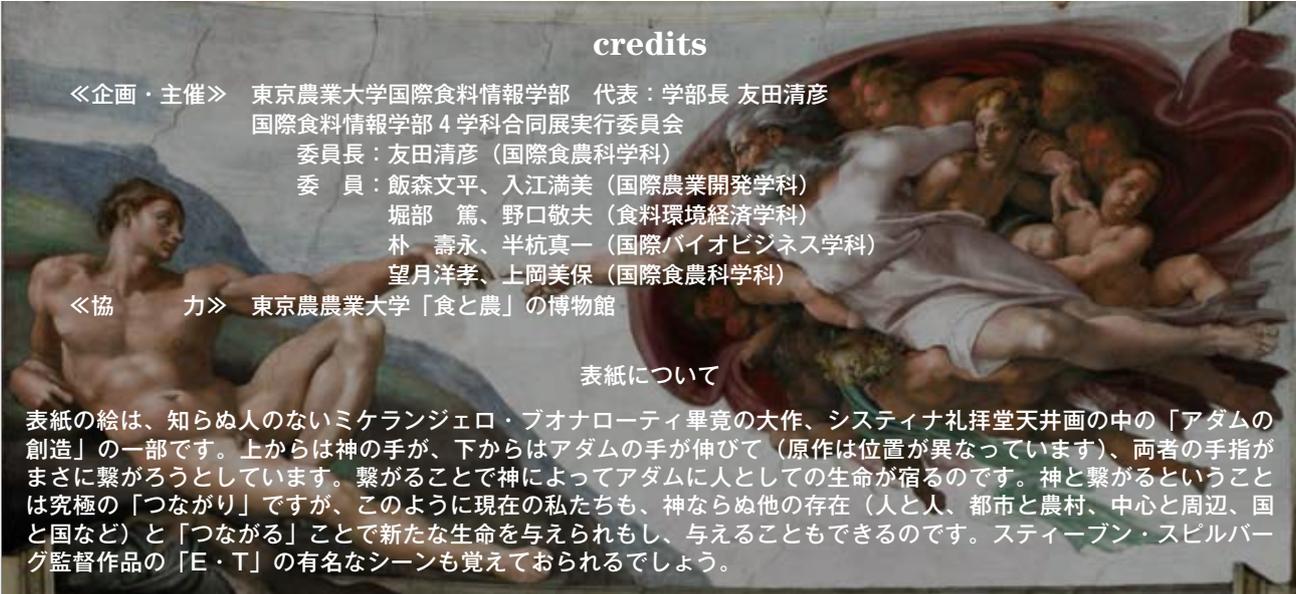
日時：2017年11月3日（金）13：30～14：30

会場：「食と農」の博物館2階 村の古民家前

### ■教員・学生によるギャラリートーク

日時：2017年11月4日（土）、5日（日）13：00～14：00

会場：「食と農」の博物館1階 企画展示室B



credits

「企画・主催」 東京農業大学国際食料情報学部 代表：学部長 友田清彦  
国際食料情報学部4学科合同展実行委員会  
委員長：友田清彦（国際食農科学科）  
委員：飯森文平、入江満美（国際農業開発学科）  
堀部 篤、野口敬夫（食料環境経済学科）  
朴 壽永、半杭真一（国際バイオビジネス学科）  
望月洋孝、上岡美保（国際食農科学科）

「協力」 東京農業大学「食と農」の博物館

表紙について

表紙の絵は、知らぬ人のないミケランジェロ・ブオナローティ畢竟の大作、システィナ礼拝堂天井画の中の「アダムの創造」の一部です。上からは神の手が、下からはアダムの手が伸びて（原作は位置が異なります）、両者の手指がまさに繋がりようとしています。繋がることで神によってアダムに人としての生命が宿るのです。神と繋がるということは究極の「つながり」ですが、このように現在の私たちも、神ならぬ他の存在（人と人、都市と農村、中心と周辺、国と国など）と「つながる」ことで新たな生命を与えられもし、与えることもできるのです。スティーブン・スピルバーグ監督作品の「E・T」の有名なシーンも覚えておられるでしょう。

東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-8

Tel 03-5477-4033 / Fax 03-3439-6528

<http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/>

開館時間 午前10時～午後5時（4月～11月）

午前10時～午後4時30分（12月～3月）

休館日 月曜日（月曜日が祝日の場合は火曜日）、毎月最終火曜日

大学が定めた日 ※臨時休業がありますのでご注意ください

## 平成29年度の特別展・企画展

### ■特別展「微細藻類の輝かしき未来」—健康・環境・エネルギー資源としての可能性に迫る—

会期：2017年4月26日(水)～8月6日(日)

### ■特別展「鶏—クラシックブリードの世界—」

会期：2017年8月30日(水)～10月15日(日)

### ■企画展 古農具展Ⅱ「農民芸術」—編まれた民具—

会期：2017年10月25日(水)～2018年3月11日(日)

### ■企画展 国際食料情報学部4学科合同展—つなぐ—

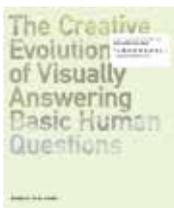
会期：2017年10月25日(水)～2018年3月11日(日)

## 刊行物のお知らせ

### ■図録『ピーター・メンツェル&フェイス・ダルージオ 地球の記録20年の軌跡

「しあわせのものさし」—持続可能な地球環境をもとめて—

(内容) 人々の営みに様々な問いかけをもちながら、20年にわたり世界中を旅した報道写真家とあるがままの事実を綿密に記録したジャーナリストでありプロデューサーでもあるパートナーとの壮大なプロジェクトを物語る写真展の図録である。



(判型) A4判変型 横型 並製 88頁

(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館

(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)

(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年6月1日

(価格) 2,600円+税

### 『農の暮らしに生きた女わざ』

(内容) その土地特有の自然と共存しながら長い間祖先から受け継いできた生活文化は、名もなき多くの女たちによって守られてきた。女たちが必死に紡いできた生活文化を、ともすると顧みられることもなく、当然のように捨てられてきたであろうただの「布」たちが語ってくれる。



(判型) B5判変型 上製 144頁

(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館

(監修) 森田瑠子 修紅短期大学名誉教授、「女わざの会」代表

(装丁・デザイン) 木村正幸・山本亜希子(デザイン工房エスパス)

(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年3月10日

(価格) 2,500円+税

### 『日本人と馬—埒を越える十二の対話—』

(内容) 信仰・民俗・歴史・考古・社会・科学・芸術と多分野にわたる識者達による対話が、様々な角度から人と馬の関係を照らし出す。



(判型) A5判 上製 420頁

(企画・製作) 東京農業大学「食と農」の博物館、東京農業大学教職・学術情報課程

(編集) 設立10周年記念特別企画展示実行委員会と「十二の対話」委員会

(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)

(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成27(2015)年3月30日

(価格) 4,000円+税

### 『樹木の形の不思議』

東京農業大学短期大学部環境緑地学科・特定非営利法人樹木生態研究会 編  
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成26(2014)年3月20日 発行  
A5判 並製 158頁 2,000円+税

### 『耕す—鋤と犁』

東京農業大学「食と農」の博物館 編  
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成25(2013)年3月30日 発行  
A5判 並製 115頁 1,500円+税